

雑詠日記

海蝶息音

卷の四

二〇一八年

谷川
修



「二十世紀イタリア最高の詩人」G・ウンガレッティは、第一詩集『喜び』の初刊に次のような注記を付したという。——この古い詩集は一冊の日記である。著者はそのこと以外に望みをもっていない。そして、かつての大詩人たちも、おのれの美しい生涯の記録を残す以外に望みをもたなかった、と信じている。……もしも芸術家として何ほどかの進歩を遂げてきたとすれば、彼は人間としてもいくぶん完成の域に近づいたことを意味するであろう。……絶えず思ってきた。想像力に身をまかせてゆけば、この宇宙が、…、詩人の特異な肉声に一致するはずである、と。

日記に雑詠を記してきたわたしは、詩人でも芸術家でもないが、詩人の文章に共感する。しかし、この習慣がもう長いあいだ続いているのに、いくぶんでも人間として成長したようには思えないから、詠じる句の方も進歩がないのだろう。わたしには想像力が乏しいし、宇宙がわたしの口をついて出る声に一致するというような考え方もできない。それでも、詩人の言うことを胸に収めて、口に漏れ出る言の葉を雑記帳に加えていくことは続けよう、いつか進歩があると信じて。

一月二日

水鳥の初漁を見る喉病む夫

穏やかな正月二日満月が殊に大きく望みを容れる

一月九日

中学の同窓会が過ぎ去った年月明かし賀状もたらす

一月十二日

寒風に目覚め未明のうちに在る

陽光が照らし舞う雪、讚仰す

一月十四日

余念なく草を抜き

念ごろに元肥を撒いて

この夏の良天願う

果樹の下

年越したりんごの小玉見出して去年のことを味わいなおす

目の行き届かない未熟な園丁の手入れは遅れがち。

一月十六日　もう一人侘助愛す 尉ジョウ火ヒ焚タキキ

尉には、老翁、炭火の白い灰となったものという意味もあるそうだ。美しい小鳥のこげ茶の翼についた白い部分を白髪と見た風流人がいたのだ。

一月二十日　一仕事終えて老夫は平凡で穏やかな日を言祝ぎ祈る

一月二十三日　弔いに鶺鴒の群れ騒ぐ寒い海

一月二十四日　思索してふと振り向けば雪の庭

一月二十七日　寒続く弔い続く人が逝く

二月三日　白鷺の踏み出す水はいまだ寒

(寒い節分)

二月八日　菜の花忌近づく司馬の記念館菜の花盗む者を生む国

(食用に蓄を八百)

ブロッコリー盗んだ人は六十五、高値とはいえ二万と余円

その畑に身を伏せて隠れたが、見つかったそうさ。悲しい出来事。

二月十四日

まつとうな人間であれ、善智識勧める道を迷わずに行け

二月十六日

冷える朝時計の音が春刻む

寒暖交々来

緑鳥潜白椿

江蘆閑静朝

老主低声吟

二月二十一日

八十万出して桜の木の下に埋められるより散骨願え

最近樹木葬ということを聞くようになった。言葉から合理的で費用のからな埋葬法かと思っていたら、今日のテレビ番組によれば平均七十四万円かかるのだそうさ。そういう埋葬園を経営する僧がにこやかに語って

いた。なんとということだろう。ここには、宗教的な良識と、生死についての深い考察が欠けている。ぎりぎりまで生活している人が増えているのに、貧者の生計に対する配慮もない。人が火葬されるときには、身体のひとつは分子になって空气中に拡散する。海に帰った水も蒸発し、二酸化炭素などとふたたび地上を循環する。コップ一杯の水に世界の賢者たちの身体となった水の分子が必ずあることを思え。海はよい埋葬地だ。縁者やほかの人が気にしないなら、いつも見ているこの内海に散骨されるのがよいと思う。

炎見て余寒を凌ぐ尉火焚き

二月二十四日

さまざまな生活用具が出土した岬の土地に早春の風

(本郷山崎遺跡)

二月二十七日

今日はカモメがゆったりと飛ぶ
夕日がすっかり春になったと告げながら沈むと
もう顔を出していた月が東の空で唱和する
おだやかな一日だった、と。

ここではそういう一日があったのに、同じ地球の他方では……

ニュース聴き歴史は人の未熟さがつくりだすもの哀れと思う

未熟なわたしには、爆撃を避けて地下室に逃れていることもや両親や何
十人ががどのようにして食べ眠って生活しているのか、想像する力もない。

三月四日

壇ノ浦が大河だと知る春の潮

春の湯で山の字形の山を観る

三月十二日

掃除機の音に鼻歌まじる春

三月十三日

水高生カッターを漕ぐ海は春

三月二十一日

しくじってしょげて眺める菜種梅雨

衰えたと嘆くのは愚かなことだ

ずっと昔から気づいているべきことだった
もちまえのことをしているのだと

無理に背伸びなどせず

身の丈に合った歩幅で歩み

努め励む者は幸せである、と

呼びかける声をおちついて聴け

三月二十三日

穏やかに苦汁も容れて春の海

カッターが權上げて休む春日和

三月二十五日

蓮根を泥土に植えて歳をとり蓮の台で覚醒を期す

三月二十七日

孫連れて墓に、手植えの花誉める

花々の下で草取り労働を学ぶ孫らに陽射し暖か

三月二十八日

わが海と彼岸を望む花の下バーベキュー食うひと時の生

こちらは二千年紀の節目に植えた桜で、満開間近。

三月二十九日

陽あたたか逆転のあるへぼ将棋

四月二日

春動く、ツバメの遺体埋葬す

四月七日

パレートが飾りを剥いで見せた世に花海棠も雨にしおれる

四月二十日

ツバメが羽ばたいて我が家の軒近くを飛ぶ
巣をつくる場所を探しているのだろうか

あるいは、先日窓ガラスに衝突して
死んだのは連れ合いだったのだろうか
燕尾服を着ているけれど

君は紳士なのかそれとも淑女なのか

君は探しているのか

この世に生を受けた者の生き方を、
見つかつたら、教えておくれ

四月二十一日

旗を立て太鼓を打つて

幾艘も漁船が巡る

カラスまで声上げ追つて

わが海が輝き歌う

対岸の山々は若葉で囃す

日もほがらかな

今日の春

四月二十三日

ウンガレットィの訳詩を読んでいるが、韻律が分からないので難渋している。三行ばかりの詩は殊にそうだ。目を閉じて反芻しても、詩人でないわたしには散文以上のものが聞こえてこない。なんとか返歌をつくった。

イチゴを食べた 今年の実りが始まったのだ もうそれだけで！

四月二十五日

雨が打つ林檎の樹下の虞美人を

四月二十九日

黒蝶

西欧の詩に虞美人草が出てきた。花の姿を電腦で確かめたら、わが果菜園にも生えて細君が雑草と見なしているヒナゲシのこと。この歳になるまでそれを知らなかった、なんとうかつな。名を知って見れば、虞や、可憐。

陽に輝く若葉の下の緑陰を

かしづく者もなく優雅に行く人よ

バラまで典雅に歌う今日

あなたの夢見ているのは何？

四月三十日

いくつもの草のかんざし集めても老夫のかしら飾るすべなし

細君が名は小判草だと教えてくれた。実が小さいから姫小判草か。茶花にもするという。生けるつもりで持ち帰ったのは正解。コップに挿し、食卓に置いた。夕食は「鯨回向」の案内文を見ながら鯨の皮をいただく。

五月五日

にぎわいの上に風吹き鳶の技

(曲芸師の上で)

五月十日

流儀を知らぬ者の困り果てた分ち書きの感想

西欧の詩人はその詩を

理論で形づくる

その理論が言葉を詩の用法で使う

理性や想像、論理や神秘、追憶や無限：

そういう理論を推測して

言葉の連関・飛躍、そして音調・韻律を

探り出さなければならぬ

むずかしい詩だ

五月十五日

屋根を行く五月の風の中の猫

五月十七日

憩う蝶と樹下に語らいグミを食む

五月二十一日

陽を浴びる軒の玉ネギ、海光る

(対岸の日の出の方角を確かめた)

六月六日

良寛の「人間一夢」の書に見入る、精神まさにしなやかに在る

六月七日
杏見る書齋の主青眼で迎えてくれて朋の語らい

六月九日
到来の鰯を味わい行く季節

(朝餉は精進だった)

六月十日
若紫紫式部の若き花

六月十三日
花残るさつき剪定花を期し

一粒の姫林檎見つけ感嘆詞

六月十六日
遅れて花開いた小さな老嬢と

生き急ぐか細い少女を

小柄で姿のよい年増のいる

食卓の上の小瓶に挿し入れた、

橙色のヒナゲシと

桃色のコスモスと

李色のバラとを。

六月二十二日　イカ釣りの船を見送る老庭師

七月六日　蓮咲いて招く台に値せず

(わが家の蓮田は中庭にある鉢)

七月九日　桓公を防ぐ漁網を陸に張る

次の日、海側の背戸に置いてあった鉢植えのトマトが攻撃を受けた。

七月十四日　梅雨明けの空は快晴、海青く、蓮の葉揺れずじりじり暑い

七月十八日　夏の陽に老青鷺は屹立す

七月二十日　温暖化如実に示す猛暑の日拳措の乱れに舌打ちをする

七月二十一日　小人の為すことわずか、よしとする

未明に目が覚めて喉の渴きを感じて氷水を飲んだ。わたしのできることは限られている。それでも、それを果たし、よい生を全うすること。

七月二十六日 桓公の攻撃受けた二個師団炎天の下赤肉さらす

八月三日 風もなく日照りの音や蝉しぐれ

八月五日 朝の海あふれる光受け容れて悠々とある汗も見せずに

八月七日 腹を出し海風入れて名ばかりの秋立つ日にも雨雲探す

八月十日 お天道と持久を競う老生はイチジク一つ授かって笑む

八月十四日 高みから青北風を呼ぶ鳶の声

八月十七日 青北風が白波寄せて海鳥の飛ぶ技光る志賀の島見る

八月十九日 釈迦仏は東海望み石窟に座して瞑想千二百年

(慶州石窟庵)

八万の大蔵經の板の書が格子の風に静やかに在る

(伽耶山海印寺)

八月二十日

一國が石塔残し燃え尽きた百済の故地にまだ苛烈な日

落花散る川風涼し扶余の城

(扶余落花岩)

炎天下物見へ登り見晴るかす川が頼りの百済の古城

(公州公山城)

八月二十二日

わが汗が甘露になった梨葡萄

七月初旬からの五十日間果菜を潤すほどの雨は一日。一週間留守にして、一日おきの水やりも今日は久しぶり。台風風の風を恐れて少し収穫してみた。

八月二十六日

すがりつく蛙に水を分けてやる

夕陽和やか海は平靜

八月三十日

月仰ぐ種族に少し水恵み月また出でて美しく照る

九月六日

天災に人心騒ぎ人事また衰えを見せこの国揺らぐ

九月十八日

耳飾りつけた少女の瞳見て秋の気を吸いコーヒーすす

九月二十五日

するすると満月昇り海風に静かに揺れる紅白の萩

九月二十六日

彼岸花咲く野にイタチが斃れ伏す

彼岸往く野道に身過ぎするカラス

田舎家を堅固に守る赤瓦

(石州瓦)

コスモスにひまわりもある瑞穂の田

九月二十八日

蜘蛛の網に捕らわれ仰ぐ天高し

十月二日

凝る肩で夕陽に映える彼岸見る肩に荷を負う此岸に生きて

十月十六日

歴史とはこういうものか、柘榴見る

十月十七日

飛ぶ雁に首をめぐらす大きな船
我、策知らず白頭を搔く

(二万トンを超える船)

十月十八日

大山が虹立てて待つ秋の興

厳かな大山見上げ夕闇に思念も消えて時は過ぎ往く

十月十九日

緊急に停車、鉄路に秋のグミ

十月二十六日

水鳥が静かに泳ぐ河口には澄んだ和音の秋気漂う

(福岡市室見川)

十月三十日

干し柿に海照らす日の反射光

陽だまりで寡黙な百舌が海を見る

身を省みて饒舌を愧ず

十一月一日

山際でアケビを見つけ皿に活けサンマを食べて秋を味わう

十一月三日

ジョウビタキ来る庭ツワの花盛り

猫も来て玉ネギ植える上天気

十一月五日

凡人の身心いやす秋陽射し

十一月十五日

一仕事一段落し柶の香りで胸を洗い清める

十一月十九日

円舞するしぐれの空の鳶の群れ

十一月二十一日

小春日の余沢に浴す金の蠅

十一月二十七日

防腐剤塗って息つく既に冬

十二月三日

めまいして我が冬を知り大悟俟つ

山茶花にあざやかな黄の蝶行脚

十二月八日

散る雪を褒める子の声聞きながら体操をする禿頭一人

十二月十五日

蜘蛛の糸にすがる木の葉や年の暮れ

十二月十八日

年送る祭り果樹に牛糞奉る

十二月二十二日

凡人は日々の願望糧にして四季を見つめて冬至に至る

十二月二十五日

『中国名言集』は杜甫四十四歳の「詠懷五百字」。改めて五百字を読む。

衰微する社会を見つめ溢れ出る杜甫の詠懐身につまされる

江海に住まう布衣あり日月を瀟洒に遠く拙なるままに

十二月二十七日

松竹と櫨の枝採り新しい年を迎える生け花にする

十二月二十八日

風に舞う雪ひとひらに願わくばこの身を託し夢幻の内に

十二月三十日 天井をイタチが急ぐ小晦日

十二月三十一日

昨日、『中国名言集 一日一言』は、蘇東坡の歳晚三首のうち、行く年を擬人化してユーモアに包んで悲哀を遣る第二首「別歳」を採り上げていた。しかし、続く第三首「守歳」が、「明年豈に年無からんや、心事恐らくは嗟跽せん、努力して今夕を尽くさん」と詠う。

「除夜贅言」

ささやかな企て果たし
我が夢が色あせてゆく
何事かであるはずだった
この年も過去となりゆく
わたしが体験した事どもと
頭をめぐった思いなどが
モノクロのおぼろな絵となつて
手の届かない背景に退いてゆく
ああ、思い出す日々、いとおいしい年

二〇一九年 正月
白江庵 謹製



『ウンベルト・サバ詩集』

詩人は、限りある日々を
生きている、

すべての人間とおなじように。だが、
なんと多様な、日々だ！

一日のさまざまな時間、四つの季節、
太陽が翳ったり、風がつのったりは、
いつも違った、気晴らし、みちづれ。
変ることない彼の情熱にとっては。

朝、起きたときの天気は、
その日いちばんの出来事、
目覚めのよろこび。

なによりものなぐさめは、…
……………

